

猫恐怖症—夢落ち編—

asitaba@ねこ

私は猫が嫌いだ。
猫恐怖症とでも言おうか。
すぐそばを横切るだけでもひいひい言うほどだ。
みんなの嫌う虫や爬虫類はなんともないのだが、猫にだけは恐怖を覚えてしまう。

そんな猫恐怖症が災いしてか、昔から猫を見るとつい手をあげてしまう。
もちろん、猫に悪い個所など一つもない。
何かあるとすれば、猫が猫であるということだ。

ある晴れた日。
外を歩いていると、前から猫がやってきた。
私はとっさに落ちていた木の枝を拾い、猫に投げつける。
猫は当然のように物影へと身を潜めた。
私が覗きこむと、猫のほうもこちらを見ているようだった。
さっさと逃げればいいものを、と更に木の枝を投げつけた。

「にゃん！」

猫が声をあげ奥の方へと走っていく。
それを見ると、私は安堵したかのように溜息を吐いた。
いざ歩き出そうかという時だ。
十字路を曲がった車に激突し、倒れてしまった。

「大丈夫ですか！」

この声を最後に私の意識は途絶えた。

次に覚えているのは、病院の中。
看護婦さんが、横でかちゃかちゃと器具をまとめていた。

「おはようございます。体調はいかがですか？」
「大丈夫です……」
「突然のことで驚いたでしょう。まだ傷が治りきっていませんので、しばらく安静にしてください」

……そういえば、頭が少し痛い気がする。

「体調がすぐれない場合は、このボタンを押していただければナースが来ますので」

そう言い残した看護婦と入れ替わって、一匹の猫が入ってきた。

「きゃあ！」

思わず声をあげた。
病室内には私と猫以外いないようだから、気がつく者もいなかった。
猫は段々と近づいてきて、ついには私の座るベッドに乗かってきた。
……あの猫だ。
あの猫だ、と分かったのは、背中のおち模様が特徴的だったからだ。
何ともかわいらしいハートマークが背中に浮き出ている。
しかし、猫だ。
猫なのだ。
可愛くとも何ともない。

「あっ」

体調がすぐれないわけではないが、これは猫恐怖症な私にとって緊急事態だ。
私は猫に目をやりながら、ボタンを押す。
これでじきに人がやってくるだろう。

「どうしましたか？」

「猫が……」

「ああ！可愛い猫ちゃんですね」

「はい、足が痛むので下に退けてくれませんか？」

「はい、いいですよ。ほら、こっちおいで」

数秒でやってきた白衣の天使により、猫はすぐさま撤去された。

「おい人間」

……はずの猫がなぜここにいるのだろうか！

「あんた怪我してるの。」

「そう！ だから出て行って！」

猫はにやりと笑った。

「……あん時、俺も足動かなくてね。不自由したよ」

てな夢を見るほどに猫が嫌いだ。